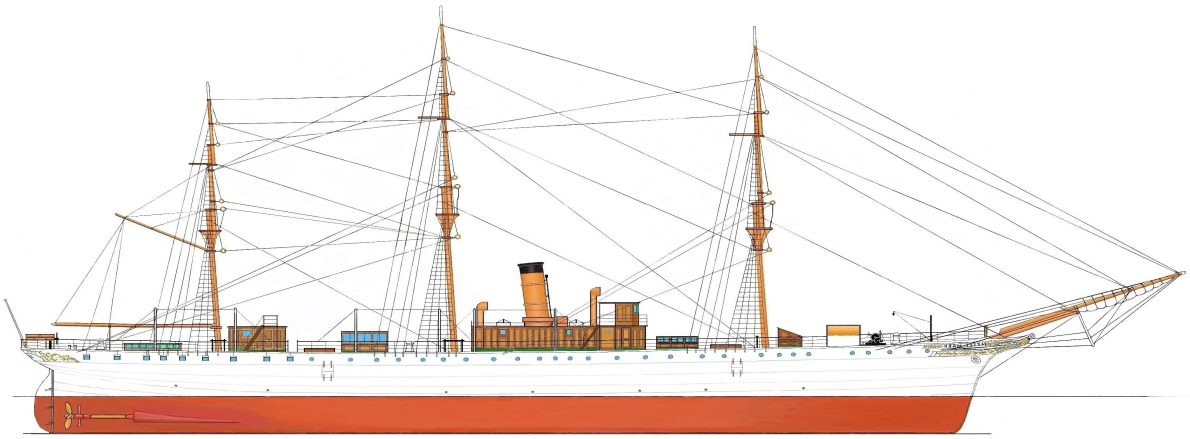
Ocean

海洋塾機関誌第20号



日本海洋塾のURL

Ocean記載のURL

令和3年12月10日

特定非営利活動法人 日本海洋塾
日本海洋塾は、世界を結ぶ海と船を、広く皆様に伝える活動により、海洋立国意識の拡充を目指しています。

§明治丸特別部会から海洋会VC明治丸Gへ§

一般会員　長尾卓治

100年の歴史はさておき、我々の同窓会である「海洋会」が税法上不利な一社法人となったのは、社会に対する貢献度スケールの不足によるものです。

その事を認識していた海洋会は、当初は、海洋会ボランティアクラブ（以下 VC）なるものを定義して 3～4 項目の分科会を立ち上げました（H3 年）。初代代表幹事には三隅田会長（当時）の 3 期先輩の安倍裕夫さんとしました(お二人の間柄は戦後、船舶運営会時代LSTで安倍さんがC/O,三隅田さんが2/Oと言う信頼関係)。 VCの主な活動内容は､内､外航船の訪船による安全指導やプレジャーボートの安全指導といった内容で、いわばPSCの民間版のようなものでした。反応もいまひとつで、MOLを辞めた私も今更と言う気持ちで interest ありませんでした。三隅田さんから聞いた話によると、彼の同期生の野呂さんがJCGのtopだったし、その後任も越中島の吉野さん(弟はNYKの海務担当常務)ということで、官民の協力が期待されると思ったとのことでした。

一方で、現在の「明治丸グループ」（以下　明治丸 G）が、庄司先生が明治丸の環境整備、保全、広報活動について同好の士を集めることから始まりました。

庄司先生個人が主体となって私信の案内状を発送され、案内状の主旨は、先生の明治丸に対する想い(愛情)が切々と書かれていて、一緒にやろうと言う内容でした。

その結果、略１年で、72 人（発足当時は登録者を使用）もの参加者が集まったのも驚きで、先生の人柄にも依りますが、先生は、入学はTN117でしたが病気のための休学もあり卒業はTN121ということもあってご自身の学友も多く、登録者の構成をみると、TK/KB高等商船学校17名、清水高等商船学校28名、東京商船大学24名、(援助会員)元大学職員2名、帆船画家1名　合計72名です。神戸商船大学が含まれていないのは先生の手元に名簿が無かったのかどうか今となっては分かりません。　会員72人の内17人が先生の学友か先輩でした。当時私は62歳で､会での位置は真ん中で気楽でした。

初めの頃は明治丸の周辺整備(草取り、清掃)や船体整備(木曜会もどき)でしたが、第一次修復（S55～63年）のあとの明治丸の一般観覧(文化庁は見学を使わない)の案内活動も始まりました。　当時、大学は観覧料金を取っており、[文化庁は観覧料金を設定して、大学が料金徴収事務官を配置し、徴収料金は全額文化庁に納められていました] その時渡されたパンフレットが現在も使われている〔観覧ご案内]の原型で､そこには､観覧者への注意事項が記載されていますが､観覧者のガイド無しの勝手な乗船を禁じる旨の記載は無く、それは、現在も変わっていません。

当時の明治丸GはG会員のみで運営していました。会員名簿にも海洋会の名を付けていません。勿論、海洋会からの支援金の制度も、連絡事項も無く、海洋会VCとも異なる為、特別部会と称した訳です。　一方、海洋会も黙っていた訳ではありません。三隅

田会長は私（長尾）に【庄司は海洋会に相談もなく勝手にボランティアグループを立ち上げている。しかも、私が其処に参加している】と烈火のごとく怒られました。と言うのは、私が OSK(MOL)に入社して最初の船の C/O か三隅田さんでした。その後コンテナ第一船で Cap と C/O の関係で、その他を含め 15 航海もご一緒した間柄ですから何でも言い合えるのです。その後明治丸 G が順調に継続しているのを見て、【海洋会の社会貢献と言うと明治丸 G の活動が唯一のものかなあ】と、気持ちが変化していったので私も安堵しました。

そして、H5 年に、海洋会の総会決議を経て、既にあった VC に「明治丸特別部会（現在の「明治丸 G」)」として参加、海洋会の社会貢献活動の一翼を担うこととなりました。

その後、明治丸 G 総会（VC 総会）に都度来賓として出席の海洋会歴代会長は必ず、海洋会の唯一の社会貢献事業であることを述べるのは、ご高承のとおりです。

発足当時の名簿を見ると【明治丸特別部会登録者名簿】とあり【会員】よりも同好会的な印象のネーミングでした。　先に、特別部会の発端は庄司先生個人による明治丸に対する想いから同好の会員の募集を始めたと書きました。　言い換えると明治丸を mother ship と感じる人達から始まりました。先生の時代は明治丸を教室や訓練の場として育ったので、現在の私達が日本丸や海王丸に抱く気持ちと似ていると思うのです。

その証として、先生の学生時代の記録映画【海のますらを】の解説を先生が H18 年 11 月に書かれたものを以下に原文のまま紹介します。　尚、出演教官や生徒の名前が場面ごとに列記されているのですがそれは省略します。

この文章から、先生の明治丸に対するお気持ちをご理解頂ければ幸いです。

★　★

この映画は昭和 16 年に松竹文化映画製作所によって製作されたものですが、当時の東京高等商船学校生徒の生活を紹介し、海事思想の普及を図ると同時に、商船士官志望者の増大を狙って各映画館で文化映画として上映されたものです。昭和 15 年から 16 年にかけての私共の実際の生活を収録し 35 ミリフィルム全三巻に編集されております。

若い時代、日本の海上輸送を担って日本国民の繁栄を支えんとの意気と熱に燃えて自己の完結に邁進した日々を思い起こし、今見ても熱い思いと深い感慨を覚えます。各場面に出て来る生徒も私の上級生や同級生そして下級生であり(TN113～123 期、TE105～115 期)、戦後も元気に活躍された方や、また大戦で海に散華された方が見受けられます。私共の在学時代、この映画が出来上がって特別試写会があり(昭和 17 年６月)、総員特別外出でニュース映画館に招待され観覧したことなど思いだします。

昭和 20 年終戦を迎え、同年９月 22 日に本学校舎は米第七騎兵師団の進駐する所となり、明け渡しに 20 時間の余裕しか与えられなかった中で、この【海のますらを】全三巻のフィルムを貴重な記録として搬出し、昭和 61 年に資料館に収納されました。そのシナリオも残されており、それには【躍進日本、海国日本の将来を背負う海の若人東京高等商船学校生徒の意気と訓練状況を描き海国日本の進展性を世に示唆せんとするも

のである】とあり、全三巻は木箱に入れられています。　この記録を繰り返して長時間（６時間）映写するようにして、明治丸の中甲板のビデオ装置で流し、説明の一助としておりました。この度これを DVD にして映写するようにしましたので、諸兄の想い出に、また現代の若い人達に何等かの示唆を与える一助にもなればと思いお頒けしています。

注、私庄司は TN117 期生として昭和 13 年秋入学、15 年夏 4 学期生の時病気休学、17 年春 TN121 期生として復学。

PS.各場面で出てくる方々のうち、私が見て名前の分かった方々を別紙に挙げてみました。この他に皆様お気付きの方がありましたならば、是非お知らせいただければ幸いです。

★　★

また、その DVD の頒布についての庄司先生の紹介文には、以下のとおり記載されています。

★　★

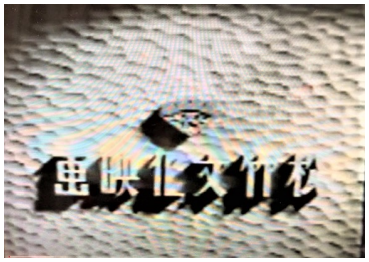
「昭和 59 年の【海洋】新年号で森利彦氏（清水 E4）が、練習船時代に見た【海のますらを】（16 ミリフィルムであった）に感銘を受け、幻の記録映画としてその行方を追って居られる記事を読んだ内海教授が森氏に連絡、森氏の絶大な御好意により、このフィルムは 45 年ぶりにクリーニングされて再生しました。

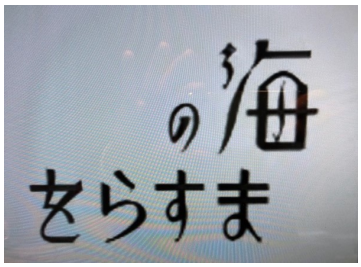
森氏によれば、この映画は劇場用の文化映画としては戦前最高のレベルの出来であると言っても過言でない価値ある文化的財産であるとのことであります。この記録映画は、明治丸中甲板でもご覧頂けますが、DVD でも頒布いたしております。」

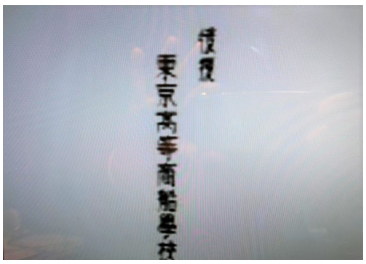
★　★

森さんは長年に亘り明治丸 G 会員でしたが、H31（R1）年 2 月に亡くなられました。明治丸特別部会には私と同じ日に参加しました。森さんは、卒業後、映画製作と言う異色の世界に進まれました。明治丸の当番の時には映画界の裏話を聞くのが楽しみでした。学校の外での一杯のお付き合いも有り難うございました。

追記　DVD の頒布は、現在は行われておりませんが、以前のように、明治丸、百周年記念館、明治丸記念館などの大学施設において、広く公開されることを望みます。







以上

§「白菊の歌」の不思議の考察Ⅳ【海洋会に寄贈された歌詞】§

正会員　佐藤勝二郎

１．初耳の歌詞

最近、日本海洋塾が公開しているユーチューブ動画の一つである＜NHK 特集　東京商船大学 1984 年 - YouTube＞と題する、森田浩司氏（東船大 N31）提供のビデオを藤田浩一氏（東船大 N19）が編集した 38 分の動画を見る機会があった。

この動画は、「官立商船学校卒業　森勝衛（90）氏」と「東海大学教授　茂在寅男氏」と「NHK アナウンサー　阿部喜充氏」が登場し“商船学校”の歴史から帆船教育の意義等を幅広く語られており、浅井栄資元学長、星野哲郎作詞家、そして初代女子学生も登場している番組であるが、NHK 放映の番組名は不明であるという。

この番組の冒頭には初代・大成丸が登場し、その BGM に「白菊の歌」が流れるのであるが、「白菊の歌」の歌詞のコレクターを自認する筆者には、驚きの「白菊の歌」が歌われていたのである。

冒頭の大成丸の映像は、昭和 11 年に東京高等商船学校の学生により撮影されたものであるとテロップがあり、BGM の「白菊の歌」の歌詞は赤枠内のものである。

文献（「海洋」）では承知していた歌詞であるが、今までに蒐集した音源には無く、初めて聴くものであり、なぜポピュラーでない歌詞が BGM になったのか、どこのレコード会社の誰が歌ったのかは、この動画を編集した藤田浩一氏も不明であるという。

ユーチューブ動画の「大成丸」の場面のテロップ

『明治 37 年に、作られたと　いわれる「白菊の歌」は　商船学校の歌として　親しまれている』

「白菊の歌」　詞　神長瞭月　　編曲　小沢直与誌

１．霞める空に　消え残る　　おぼろ月夜の　秋の空
　　身にしみ渡る　夕風に　　背広の服をなびかせて
２．紅顔可憐の美少年が　　商船学校の　構内の
　　練習船のメーンマスト　　トップの上に立ち上り
３．故郷の空を眺めつつ　　父母よ　妹よ　はらからよ
　　花咲く丘よ　せせらぎよ　　男不覚の　この涙
４．君が贈りし　白菊の　　しおり　抱けば波の音
　　ちまたのあかり　ほのぼのと　　犬の遠吠え　かすかなり

そこで NHK アーカイブスを調べると、この番組は昭和 56 年（1981）1 月 16 日の午後 8 時から 8 時 45 分まで教育番組で放映されたもので、番組名は【NHK 文化シリーズ生活の中の日本史　「学び舎の譜」(1) ―海運立国・東京高等商船学校―】であることがわかった。

しかし、NHK アーカイブスの番組公開ライブラリーには無く、オリジナル映像を確認することは出来なかった。

２．文献・音盤に現れる初耳の歌詞

聴き慣れない「花咲く丘・・せせらぎ・・はらから・・男不覚のこの涙」の歌詞の作者は神長瞭月氏であることは明らかであるが、作成時期が不明である。

大正 3 年 3 月初版刊行の「瞭月新作歌曲全集」にある「霞める空」（副題：商船学校歌）の歌詞の一部に「花咲く丘よせせらぎよ、男の児不覚のこの涙」があると田口資料（註 1）は報告しているのであるが、このあと昭和 43 年までの歌集やレコードには見出すことは出来ないのである。

昭和 43 年５月に東芝レコードから、神長瞭月氏（79 歳）は「演歌集　これが演歌だ」を発売しており、この中に「白菊の歌」が「商船学校寮歌（神長瞭月詞・曲）」の題名で氏自身の歌唱で収録されている。

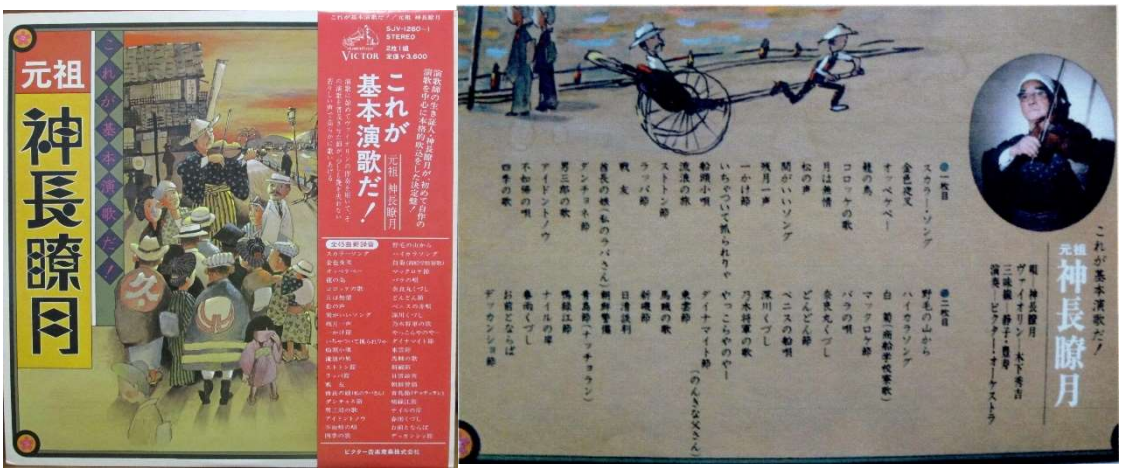
しかし、歌詞は三番までで「はらからは」はあるが、「男不覚の涙」は無いのである。（青枠表参照）

また、昭和 46 年 9 月の「海洋」671 号に神長瞭月氏と面談した松沢省吾氏（清Ｅ２）の寄稿記事があり、ここには神長氏が『レコードにいれるために、はじめは十番あった歌詞を三番にまとめ直したわけです』との談話があり、その歌詞を教示されており、三番までが紹介されている。

此の、神長氏から松沢氏に教示した歌詞は、NHK 放映の「学び舎の譜」の大成丸の BGM の一～三番と一致しているのである。

昭和 51 年 2 月には、ビクターレコードから神長瞭月氏が、２枚セットの LP レコード「これが基本演歌だ！　元祖　神長瞭月」（45 曲）を発売している。この中に「白菊の歌」が「白菊（商船学校寮歌）」の題名で収録されている。

このレコードに収録されている曲が、そのまま昭和 56 年 1 月の NHK 放映の「学び舎の譜」の大成丸の BGM に使用されていることが確認できる。



3. 歌詞の変化比較表

歌詞に【花咲く丘・・せせらぎ・・はらから・・男不覚】の登場時期			
1914（大正 3 年 3 月）	1968（昭和 43 年 5 月）	1971（昭和 46 年）	1971（昭和 46 年）
瞭月新作歌曲全集・初版	東芝レコード	海洋 671 号（S46.10）	海洋 672 号（S47.1）
（東京の歌）	演歌集・これが演歌だ	神長瞭月との面会記事	日本寮歌祭出場記事
霞める空/商船学校寮歌	商船学校寮歌	白菊の歌	白菊の歌
（田口資料）	神長瞭月　詞・曲	神長瞭月　教示	＜海洋会への寄贈歌＞
霞める空に消え残る　おぼろ月夜の秋の空　身にしみ渡る夕風に　背広の服をなびかせて			
紅顔可憐の美少年が　商船学校の構内の　練習船のメーンマスト　トップの上に立ち上がり			
故郷の空を眺めつつ ああ父母は今いずこ 花咲く丘よせせらぎよ 男の児不覚のこの涙	故郷の空をながめつつ あゝ父母は今いかに わがはらからよ今いづこ 少年左手に持つものは	故郷の空を眺めつつ 父母よ妹よはらからよ 花咲く丘よせせらぎよ 男不覚のこの涙	故郷の空を眺めつつ 父母よ妹よはらからよ 花咲く丘よせせらぎよ 男不覚の此の涙
		（以下略で不明）	君が贈りし白菊の 栞抱けば波の音 ちまたの灯りほのぼのと 犬の遠吠え幽かなり

4. 寄贈された歌詞

第 1 回日本寮歌祭が昭和 37 年に開催され、海洋会会員がほとんど毎回出場しており、「海洋」には「白菊の歌」が歌われたと毎回の出場報告が掲載されている。

昭和 47 年 1 月の「海洋」672 号には、第 11 回日本寮歌祭の出場の報告がされており、この記事の中に神長瞭月氏が「白菊の歌」は十一番もある長い詩であるから、現代風に四番までにまとめて、寮歌祭に大いに歌ってくださいということで寄贈されましたとの紹介記事があり、前項の青枠表の歌詞が掲載されている。

此の、寄贈された歌詞は昭和 56 年 NHK 放映の「学び舎の譜」の大成丸の BGM の一番～四番と一致しているのである。

さらに、右掲の平成 14 年 1 月の「海洋」825 号 20 頁に掲載の「2001 年日本寮歌祭」出場報告の記事をみると、日本海事広報協会発行の新聞「海上の友」紙上に神長瞭月氏が商船学校に献ずるといわれた云々と「海洋」672 号の記事のことが書かれているのである。

昭和四六年七月二一日「海上の友」に記載の【「白菊の歌」の作者は健在】の記事の抜粋

この「白菊の歌」の使用権を神長さんは、去る四十二年十一月にコロムビア音楽芸能KKに譲渡している。

〝嗚呼玉杯に〟〝都ぞ弥生の〟〝紅萌ゆる〟など、明治から大正、昭和三代にわたって格調高く歌い継がれた寮歌のなかにあって、そこはかとない哀調を帯びて親しまれた〝霞める空に〟をわが寮歌とするにはためらいがある。軟弱だなどと言われもしましたが、東京、神戸、清水三校統一出場した際に、この歌とされ、さらには作者神長瞭月さんが「海上の友」紙上で、この歌を商船学校に献ずると言われたこともあって、わが歌として年々歌い継がれ、これを高唱する時場内から

しかし、日本海事広報協会を訪れ、昭和 46 年の「海上の友」を調べると、昭和 46 年 7 月 21 日号に、協会の記者（松沢氏）が神長瞭月氏と面談した記事はあるが「白菊の歌」の寄贈に関する記述は発見できなかった。

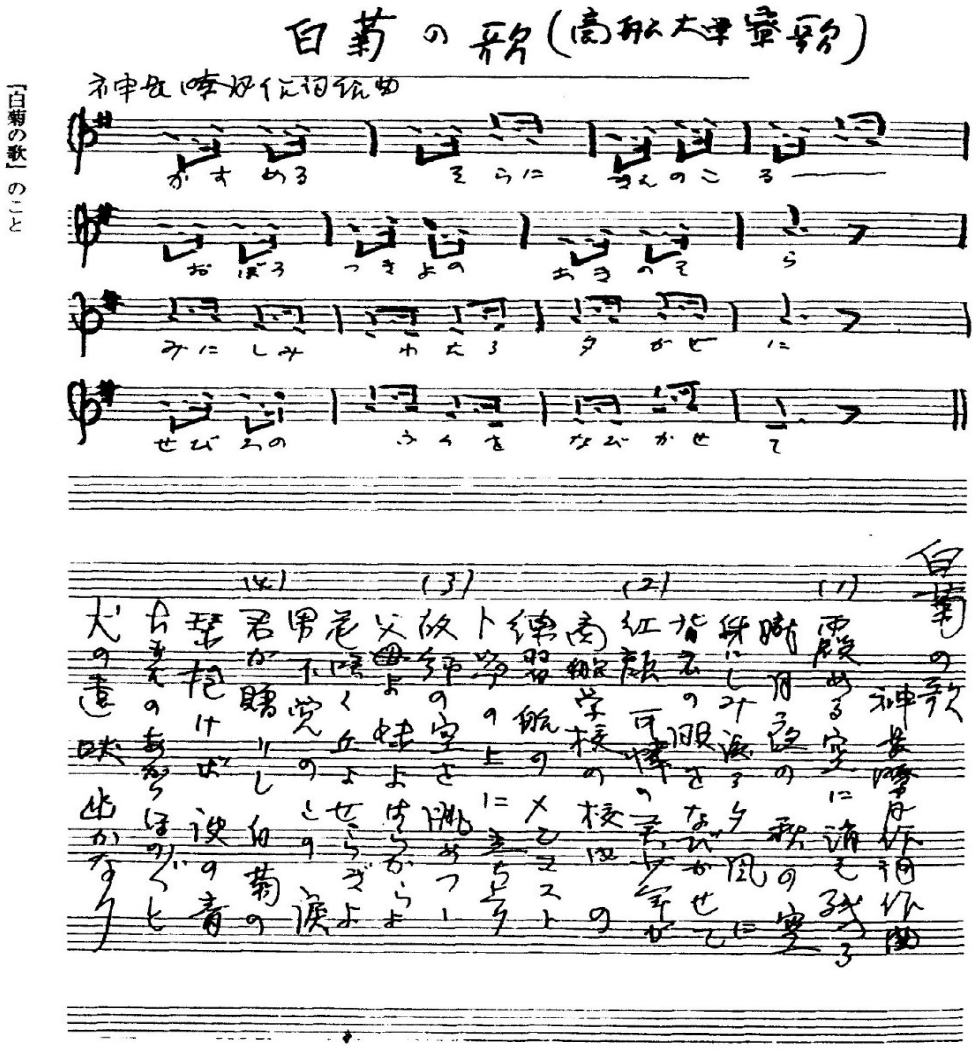
記事の内容は「海洋」671 号の松沢氏の面談記事と殆ど同じであるが、最後のほうに【神長さんは、この「白菊の歌」の使用権をコロムビア音楽芸能 KK に譲渡している】との左掲の記述がある。

ところが「海洋会」が平成 6 年・26 年に刊行した「檣濤歌集」の「日本寮歌祭主唱歌」に「白菊の歌」があるのであるが、この寄贈された歌詞は無く、何も紹介されていないのは、このコロムビアへの譲渡が関係あるのではないかと想像している。

５．神長瞭月氏の遺稿の楽譜と歌詞

昭和 56 年の NHK テレビ放映画面の歌詞テロップは赤枠のとおりであるが、これは田口資料に掲載されている、神長瞭月氏の遺族の若林月子さんから、平成 11 年（筆者推定）に田口氏が頂いたという、楽譜の下に書いてある手書きの歌詞と一致するのである。

この楽譜の歌詞は、大正 3 年の「瞭月新作歌曲全集」と昭和 43 年発売の東芝のレコード歌詞とも異なり、昭和 46 年 10 月の「海洋」671 号に記載されている松沢氏に教示したものと昭和 47 年 1 月の「海洋」672 号に記載されている、寄贈を受けた歌詞及びビクターのレコード歌詞と一致することから、昭和 43 年以降昭和 46 年までの間作成されたと推定される。しかし、どの歌詞の「白菊の歌」か分からぬが、昭和 42 年 11 月にコロムビアに使用権（？）を譲渡しているので、疑問は残るのである。



６．まとめ

明治後期生まれの商船学校寮歌「白菊の歌」は、その出自に疑問がもたれており、その歌詞も長い年月の間に変異種が沢山生まれている。

「花咲く丘・・せせらぎ・・はらから・・男不覚のこの涙」の語句のある「白菊の歌」が作成されたが、新たな不思議も生まれたのである。

大正 3 年 3 月　　瞭月新作歌曲全集
大正 8 年 4 月　　赤本:商船学校々歌（加賀谷書店）　著作者:神長瞭月　非当該歌詞
昭和 42 年 11 月　神長瞭月　「白菊の歌」の使用権をコロムビアに譲渡
昭和 43 年 5 月　東芝レコード　「演歌集　これが演歌だ」発売
昭和 46 年 7 月　海上の友　記者と神長瞭月氏の面談記事　歌詞教示
昭和 46 年 9 月　海洋　松沢省吾氏と神長瞭月氏との面談記事 歌詞教示
昭和 47 年 1 月　海洋　歌詞の寄贈記事
昭和 51 年 2 月　ビクターレコード　「これが基本演歌だ！　元祖 神長瞭月」発売
昭和 51 年 12 月　神長瞭月　永眠（88 歳）
昭和 56 年 1 月　NHK「学び舎の譜」放映　　大成丸シーンの BGM に使用
平成 14 年 1 月　海洋　「海上の友」に商船学校に献ずる記事

不思議な疑問 1

練習船→大成丸→商船学校→「白菊の歌」と連想されるが、なぜ NHK は大成丸の映像の BGM に、世の中に知られていない歌詞のほうを採用したのだろうか。

不思議な疑問 2

なぜ、神長瞭月氏は題名と歌詞の推敲を重ねたのか。

不思議な疑問 3

日本寮歌祭で歌う「白菊の歌」を海洋会に寄贈した理由はなにか。
テレビで何度か放映されている日本寮歌祭では、高等商船学校の寮歌としてアナウンスされているのであるが、海洋会会員の中には出自に不明な点があり、果たして「白菊の歌」が高等商船学校の寮歌として適切かどうか疑問を持たれていたから、神長瞭月氏は海洋会に正式に寄贈して認知されることを期待したのであろうか。

不思議な疑問４

コロムビアに譲渡した「白菊の歌」の“使用権”とは一体何だろうか。

註 1：田口資料
1999（H11）3.15. 早大図書館紀要 46 号　田口親　「白菊の歌」のこと

§明治丸を造ろうと言い出したのは誰？私考§

正会員　都築雅彦

1,「明治丸」の厄介ごと

重要文化財「明治丸」のボランティアガイドに参加して以来、来館者への解説のためいろいろ勉強してきたが、中には予習をしてくる人もあって、質問に「え？」となることがしばしばあって、いまだに答えの出ないものがある。

なかでも、いまも厄介なのは、数年ほど前に来観した明治村の文芸員からの質問で

「明治の初めにこんな船を造ろうと誰が言ったんですか？」というもの。

本船建造に関する現存の資料は、明治 6 年 3 月付け工部省少輔山尾庸三が正院あてに「建造発注してよいか」との伺書で、

これには、本船の用途として「灯台巡廻船」と決まっていることから、新造船の建造、船の用途、運用方法についてすでに議論され、これでいこうとなっていたことが伺われる。

（この時、上司の工部省大輔伊藤博文は岩倉遣外使節として欧州に居た）

これだけのことを工部省少輔山尾庸三が計画したとは考えられず、相当の出費ともなるので、緊縮財政だった太政官内での意見合意がなされたはず。

また、この伺書に添付されていたとされている計画要目、概要図などがあるが、ここまで構想を詰めていることは、かなり以前より検討があったはずで、明治 5 年後半ほどには新造の話が持ち上がっていたと推定される。

2，明治 5 年ごろの太政官政府は？

維新後の公家中心太政官政権は行動力がなくダメだと廃止され、明治4年 7 月に 3 院制（右院・正院・左院）による第 3 次太政官体制（藩閥政権）が発足。

薩長土肥の旧藩士族達による中央集権体制に替り、その後は、西欧に追いつけとばかりに近代国家へ向けての活動が始まり、前代未聞の岩倉遣外使節団の米欧派遣と、日本初の天皇の全国巡覧が始まった。

3，岩倉遣外使節団の出発

明治 4 年 11 月に、西欧諸国の状況を知るにはまずは視察調査するしかないとして、岩倉遣外使節団がに米国向け出発した。

特命全権大使に、右大臣岩倉具視、

特命全権副使に、参議木戸孝允、大蔵卿大久保利通、工部大輔伊藤博文、

外務少輔山口尚芳。 その他一等書記官以下多数が欧米を視察、留学など、

世界で初めての出来事となった。

使節団一行は、通商条約改定をもくろみ、米合衆国ですったもんだとぐずぐずしてい

たが、らちが明かず、

明治 5 年 8 月 16 日にイギリス（アイルランド･クイーンズタウン）に渡り、12 月 16 日までの 4 か月にわたってイングランド各地を見て回った。

主に産業形態の実情を視察、調査しているのであるが、駐日公使の S･H･パークスが「岩倉、木戸、大久保等が居ない日本にいても意味がない」と思ったのか、長期休暇をとってイギリス本国に帰り、案内人となってかなりの部分をアテンドしている。

使節団は、ロンドン、リバプール、グラスゴー、エジンバラなどの大都市とその周辺の工場を訪れており、その移動には鉄道、小蒸気船などを使って精力的に動き、各種団体と交流している。 工業地帯となっていたスコットランドのグラスゴー、エジンバラでは、各種類の産業機械製造工場を視察しており、各地で産業会の有力者達とも接している。

要人達がせっかくイギリスに行ったのだからとして、日本で西洋式灯台の建設に尽力中だった R･H･ブラントンも日本から参加し、灯台見学を案内するなどイギリス側も対応に大変だった。

4，汽船を造らないか？

彼らとの歓談の話の中で、安政 5 年 7 月日英修好条約締結で王室ヨット「エンペラー号」がビクトリア女王から幕府に贈られ、幕府軍艦「蟠竜丸」となって箱館戦争に参戦したが、明治 2 年 5 月 11 日の海戦で損傷、任意座洲、機関を破壊、放棄された話しも出たのでは？ と思慮されるのだが･･･。

「蟠竜丸」は、その後修理され明治 6 年に日本政府が改めて購入したが、この話が出ると、明治政府としては 「維新の戦いで沈めてしまったので、新しい船を注文したい」 と言わざるを得なくなるし、イギリス側にはこれを言わせたい意向があったか？。

また、明治新政府が、地方に不安士族達を抱えていることは、駐日公使 S･H･パークスも承知しており、右大臣岩倉具視、大蔵卿大久保利通らの決定権者が同道していることもあり、「政権要人の皆様の移動用（避難用）として汽船を注文されてはいかがでしょう」と売り込んだことも考えられる。

また、各地で歓迎されたお礼として、「新造船を注文します」 となってもおかしくない。

グラスゴーで伊藤博文が「明治丸」を建造した R･ネイピア造船所を訪問したかどうかは定かではないが、「以前に山尾がお世話になりました、おかげさまで工部省で活躍しています」 くらいはあったと考えるほうが自然。

１８７５年（明治 8 年）版ロイズレジスターブックには、明治 7 年英国で新造竣工した 3 隻の日本汽船（「明治丸」「兵庫丸」「隅田丸」が記録されており、このことは、使節団の英国滞在中に建造発注していないと合わない。

また、3 隻とも、レジスターブックの「Masters」の欄が「A･R･ブラウン」となっており、当時ブラウンは日本に居たはずで、3 隻の売りつけにはイギリス側の策略がうかがわれる。

（ボランティアガイドブック No2 明治丸関連資料編参照）

この 3 隻の受取には、ブラウン船長が伊藤博文の命で英国に出張しているが、彼は「明治丸」の受け取りだけでイギリスに行ったわけではなく、当時、彼は征台のため「蛮地事務局顧問」（征台の役で、軍需品輸送船を買い入れる役目）に就いており、汽船調達のためイギリスに出かけ、そのついでに「明治丸」他 2 隻を受け取ったもの。

3 隻のうち、「隅田丸」は、G･E･O ラムゼー船長によって日本に回航され、征台の役に間に合っている。 その後ラムゼー船長は三菱商船学校の教授となり、日本で死去したため、顕彰碑が海洋大学越中島キャンパスに建てられている。

隅田丸は、征台の役後三菱に払下となっている

５，本国はどうだった？

岩倉使節団が外国に出かけたあとの留守政府は、太政大臣三条実美、参議西郷隆盛、参議大隈重信、参議板垣退助等が国内を守っていたが、明治 5 年 2 月に兵部省が陸軍省、海軍省に改組となったこともあり、統帥者としての明治天皇による「全国要地巡幸原議」が建白され、天皇による全国巡覧が始まった。

この建白には、参議西郷隆盛の強い影響があったとみるのが妥当で、西郷は戊辰戦争で錦の御旗の威光で幕藩体制を倒したことから、維新後の日本を天皇に見てもらいたい思いもあったのではないか。

この建白により、まず最初の巡幸地として第 3 次太政官政府の中心となった薩長土肥の状況を巡覧していただくとのことで、大阪中国西国巡幸（第 1 次大巡幸）が海軍の軍艦を使って挙行された。　　（ボランティアガイドブック No2 明治丸関連資料編）

5 月 23 日品川発～伊勢神宮～大阪～下関～長崎～熊本～鹿児島～丸亀～神戸と巡られ、7 月 12 日横浜帰着の船旅であった。

旗艦となった「龍驤」は、旧熊本藩所有のイギリス製帆走軍艦であったが、旧式艦のため狭い艦内環境は天皇以下政府顕官の旅には不向きで、これで汽船が欲しいとなったとも考えられる。

供奉者は、参議西郷隆盛、宮内卿徳大寺實則、陸軍少輔西郷従道、海軍少輔川村純義、他近衛兵 70 人ほどだったため、艦内はごった返しの状況だったと思われ、50 日ほどの艦内生活は相当に厳しかったと思われる。

また、龍驤は艦隊のなかでも喫水が深い大型艦のため、長崎入港のとき汐待せざるをえず、お供の艦は先に入港してしまい、総指揮官の西郷隆盛が激怒した記録が残っている。 明治天皇はこの時のことがよほど印象深かったと思え、東京に帰られてからしばしば「あの時の西郷はすごかった」と言われたという。

西郷から見たら、旗艦を沖に残して護衛艦隊が入港するなど、思いもよらない事態だったと思われる。

さらに、鹿児島では、旧藩主島津久光から「新体制には反対で旧幕府体制に戻してほしい」との意見書が出され、政情は先行き不安な情勢となった。
また、西郷隆盛は、薩摩藩内の士族も新体制に不満で、反乱に蜂起する可能性も感じていたようで、これをなだめるため征韓論に傾いていったが、自分達が戊辰戦争で勝ち取った体制を維持するには、天皇はじめ政府高官を守ることが第一と考え、薩摩士族等を近衛兵として東京に呼び寄せている。
いざとなったら東京から船で避難することも頭にあったのではなかろうか、とも思えるが、西郷の思考にはこの考えは無かったようである。
相談相手の大久保利通は外国にいたため、連絡には郵便手紙しか無いが、出した形跡はない。

6，今のところの答え

以上のことから、当時の太政官政府は、近代化に向けて動きまわる範囲が全国区となったため、だれが汽船が欲しいと言ってもおかしくない状況であるが、実際に発注したのは、太平洋、大西洋を渡って、日本にも汽船が必要と身に沁みていて、しかも建造する国を訪れた岩倉使節団と考えるほうが自然で、S･H･パークス、大蔵卿大久保、工部大輔伊藤らが 「全国を動き回るには汽船が要る」 と提案、最終的に右大臣岩倉具視が「皆がそのようにいうのなら･･･」 となったのではないかと思われる。

日本人では動かせない船を政府意向で運用するには、イギリス人船長、航海士と機関士に頼むしかなく、彼らを指揮できるのは A･R･ブラウン船長が適任のはずで、そのため工部省所属船とし、用途を灯台巡廻船とした、というもの。

「明治丸」は、日本到着後に御座所を設けることになったが、発注当時は政府要人達の出張用と考えており、天皇のお召船になることは想定外ではないかと思われる。
当初より天皇が座乗することが分かっておれば、ロイヤルシップを建造するお国柄から、御座所は、特別室の構造仕様に建造するはずで、今のような造りは後付けである。
（2 段ベッドの話ではない）

使節団がイギリスに滞在している間には、天皇の全国巡幸や地方士族達に不満が鬱積している国内事情は伝わっておらず、使節団がこれを知るのは大陸に渡ってからと思える。 大久保利通が早めに帰国したのは、国内に対応するためだったか･･･？。

以上が現状の答えですが、元気維持のためもう少し追及してみようと考えています。

§肥田浜五郎と小栗上野介、そしてウェルニー§

正会員　澤間譲治

前回の Ocean１９号では、【突然『造船所の建造は石川島ではなく、横須賀に建造する事になり、その管理をフランスに任せる事になった』との寝耳に水の知らせが幕府から入り、『機械の注文が済んだら直ちに帰国せよ』との命令を受け取る事になった。何故そのような事になったかの顛末は次号に譲るが、肥田浜五郎はあくまでも石川島が造船所として最適だと考えていた様で・・・・】と述べたが、本号ではその顛末を中心に当該意思決定に大きな役割を演じた小栗上野介の足跡を追ってみたい。

肥田浜五郎がオランダへ出発してまもなく、新任のフランス公使**ロッシュ**は幕府に造船所や製鉄所の必要を説き、その設置をフランスに委託するなら、みずから責任をもって尽力しようと申し出た。これはフランスが他国よりも親幕府的で、さらに心証をよくしようとするための政治的野心（特に英国を意識しての）からでもあった。幕府は勘定奉行の**小栗上野介忠順**に命じて通訳**栗本瀬兵衛**とともにロッシュに面会させ詳細を確認させた。

小栗上野介忠順は日米神奈川条約後の批准交換のため、正使新見豊前守らの監察として渡米した人物で、財政通といわれ、勘定奉行、陸軍奉行、海軍奉行などを歴任している。彼の理想は徹底的に薩長を打倒するとともに、陸海軍の充実と洋式訓練を実施することであった。幕府を中心とする絶対主義的政権をあくまでもすてず、それにフランスの援助をえて、近代設備をとり入れようとしていた。したがって、はじめから親仏なところへ、フランスの方から横須賀造路所の設置をすすめてきたのだから、一も二もなく、フランスのいうとおりに従ったというのが背景にあったようである。

ここで若干脇道に逸れるが、横須賀造船所と当該政策変更決定に大きな影響を与えた小栗上野介忠順と言う人物を知っておくことも幕末維新の歴史と当時の造船事情を概観するうえで重要だと思われるので、彼の来歴について、ネット情報を基に少し詳細に触れておきたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊**小栗上野介忠順**＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

文政 10 年（1827 年）、禄高 2,500 石の旗本・小栗忠高の子として江戸駿河台の屋敷に生まれる。幼名は剛太郎。当初、周囲からは暗愚で悪戯好きな悪童と思われていたが、成長するに従って文武に抜きん出た才能を発揮し、14 歳の頃には自身の意志を誰にはばかることなく主張するようになったと言われている。

8 歳から、小栗家の屋敷内にあった安積艮斎の私塾「見山楼」に入門、栗本鋤雲と知り合うこととなる。武術については、剣術を島田虎之助に師事した。後に藤川整斎の

門下となり、直心影流免許皆伝を許される。また砲術を田付主計に、柔術と山鹿流兵学（19 歳から 4 年間）を窪田助太郎清音（のちの講武所頭取）に師事している。
天保 11 年（1840 年）頃、田付主計の同門であった年長者の結城啓之助から開国論を聞かされ、以後影響を受ける。

天保 14 年（1843 年）、17 歳になり登城する。文武の才を注目され、若くして両御番となる。率直な物言いを疎まれて幾度か役職を変えられたが、そのたびに才腕を惜しまれて役職を戻されている。嘉永 2 年（1849 年）、林田藩の前藩主建部政醇の娘・道子と結婚する。

嘉永 6 年（1853 年）、アメリカ合衆国東インド艦隊司令長官マシュー・ペリーが浦賀に来航する。その後、来航する異国船に対処する詰警備役となるが、戦国時代からの関船しか所持していない状態ではアメリカと同等の交渉はできず、開国の要求を受け入れることしかできなかった。この頃から外国との積極的通商を主張し、造船所を作るという発想を持ったと言われる。

安政 2 年（1855 年）、父が医師の誤診により死去し、家督を相続する。安政 6 年、小栗豊後守を名乗る。

アメリカ渡航
安政 7 年（1860 年）、遣米使節目付（監察）として、正使の新見正興が乗船するポーハタン号で渡米する。2 か月の船旅の後、サンフランシスコに到着する。代表は新見であったが、目付の小栗が代表と勘違いされ、行く先々で取材を受けた。勘違いの理由として、新見をはじめとして同乗者の多くは外国人と接したことがなく困惑していたが、小栗は詰警備役として外国人と交渉経験があるため落ち着いており、そのため代表に見えたとされる。また「目付とはスパイのことだ。日本（徳川幕府）はスパイを使節として同行させているのか。」という嫌疑を受けた。その際に「目付とは censor である」と主張して切り抜けたという。「censor」という役の重さが代表扱いされる一因かと推察される。

フィラデルフィアでは通貨の交換比率の見直しの交渉に挑んだ。これは日米修好通商条約で定められた交換比率が不適当で、経済の混乱が生じていたためである。小栗は小判と金貨の分析実験をもとに主張の正しさを証明したものの、比率の改定までは至らなかった。しかしこの交渉に関して、多くのアメリカの新聞は絶賛の記事を掲載する。また小栗はワシントン海軍工廠を見学した際、日本との製鉄及び金属加工技術な

どの差に驚愕し、記念にネジを持ち帰った。また、訪米中にはブキャナン大統領に謁見している。

その後、ナイアガラ号に乗り換え、大西洋を越えて品川に帰着する。帰国後、遣米使節の功により 200 石を加増されて 2,700 石となり、外国奉行に就任する。

内政・外交に携わる
文久元年（1861 年）、ロシア軍艦対馬占領事件が発生。事件の処理に当たるが、同時に幕府の対処に限界を感じ、江戸に戻って老中に対馬を直轄領とすること。今回の事件の折衝は正式の外交形式で行うこと。国際世論に訴え、場合によっては英国海軍の協力を得ること。などを提言したが、容れられず外国奉行を辞任した。

文久 2 年（1862 年）、勘定奉行に就任し、名乗りを小栗豊後守から上野介に変更する。幕府の財政立て直しを指揮する。当時、幕府は海軍力強化のため 44 隻の艦船を諸外国から購入しており、その総額は実に 333 万 6 千ドル。小栗は、駐日フランス公使レオン・ロッシュの通訳メルメ・カションと親しかった旧知の栗本鋤雲を通じて、ロッシュとの繋がりを作り、製鉄所についての具体的な提案を練り上げた。当初は縁のあるアメリカ人を招聘しようとも考えたが、当時アメリカは南北戦争で国が疲弊し外国を助ける余裕がなかったため、結果的にロッシュとの繋がりができたフランス中心の招聘となった。

文久 3 年（1863 年）、製鉄所建設案を幕府に提出、幕閣などから反発を受けたが、14 代将軍徳川家茂はこれを承認し、11 月 26 日に実地検分が始まり、建設予定地は横須賀に決定された。なお、建設に際し、多くの鉄を必要とすることから、上野国甘楽郡中小坂村（現在の群馬県甘楽郡下仁田町中小坂）で中小坂鉄山採掘施設の建設を計画し、武田斐三郎などを現地の見分に派遣した。見分の結果、鉄鉱石の埋蔵量は莫大であり、ついで成分分析の結果、鉄鉱石の鉄分は極めて良好であることが判明した。ただし、近隣での石炭供給が不十分であるので、しばらくの間木炭を使った高炉を建設すべしとの報告を受けている。また慶応元年（1865 年）には高炉で使用する木炭を確保するため、御用林の立木の使用について陸軍奉行と協議をしている。

慶応元年（1865 年）11 月 15 日、横須賀製鉄所（後の横須賀海軍工廠）の建設開始。費用は 4 年継続で総額 240 万ドルで、これが後の小栗逮捕における徳川埋蔵金説に繋がったとも言われるが、実際には万延二分金などの貨幣の増鋳による貨幣発行益により建設費用を賄っていた。横須賀製鉄所の建設を巡っては、相当な費用の負担を強いることから幕府内部の反対論は強く、建設地を横須賀にすることへの反対論もあった

が、工作機械類がフランスに発注済であり、最終的に製鉄所は建設された。多くの反対を押しきれたのは、計画の進捗が迅速であり、外部がこれを知った時には取りやめることが不可能であったからだと言われている。

小栗は横須賀製鉄所の首長としてフランスのレオンス・ウェルニーを任命した。これは幕府公認の事業では初の事例だったが、この人事により職務分掌・雇用規則・残業手当・社内教育・洋式簿記・月給制など、経営学や人事労務管理の基礎が日本に導入された。また、製鉄所の建設をきっかけに日本初のフランス語学校・横浜仏蘭西語伝習所を設立。ロッシュの助力もあり、フランス人講師を招いて本格的な授業を行った。この学校の卒業生には明治政府に貢献した人物が多い。

小栗は陸軍の力も増強するため、小銃・大砲・弾薬等の兵器・装備品の国産化を推進した。

文久 2 年（1862 年）12 月、銃砲製造の責任者に任ぜられると、それまで韮山代官江川英武に任されていた湯島大小砲鋳立場を幕府直轄として関口製造所に統合し、組織の合理化や当時多発していた製造不良の低減に着手した。これに伴い、それまで実務を取り仕切ってきた江川の手代の代わりに武田斐三郎、友平栄などの気鋭の技術者を関口製造所の責任者として新たに登用した。また、ベルギーから弾薬火薬製造機械を購入し、滝野川反射炉の一角に設置、日本初の西洋式火薬工場を建設した。

小栗は更なる軍事力強化のため、幕府陸軍をフランス軍人に指導させることを計画する。慶応 2 年 12 月 8 日（1867 年 1 月 12 日）、フランス軍事顧問団が到着、翌日から訓練が開始された。また軍事顧問団と時を同じくしてフランスに、大砲 90 門、シャスポー銃 10,000 丁を含む後装小銃 25,000 丁、陸軍将兵用の軍服 27,000 人分等の大量の兵器・装備品を発注、購入金額は総計 72 万ドルにも上った。

経済面では、慶応 2 年（1866 年）には関税率改訂交渉に尽力し、特にフランスとの経済関係を緊密にし、三都商人と結んで日本全国の商品流通を掌握しようとした。これが後の商社設立に繋がることとなる。翌慶応 3 年（1867 年）、株式会社「兵庫商社」の設立案を提出、大阪の有力商人から 100 万両という資金出資を受け設立した。これは資本の少なさから日本商人が海外貿易で不利益を被っていることを受け、解決には大資本の商社が必要との認識によるものであった。100 万両という設立資金は、当時設立されていた株式会社の中でも大きく抜きん出たものであった。

8 月 9 日、日本初の本格的ホテル、築地ホテル館の建設が始まる。これは小栗の発案・主導のもとに清水喜助らが建設したもので、翌年 8 月 10 日に完成する。このように、小栗の財政、経済及び軍事上の施策は大いに見るべきものがあり、その手腕については倒幕派もこれを認めざるを得なかった。

大政奉還

慶応 3 年 10 月 14 日（1867 年 11 月 9 日）、15 代将軍徳川慶喜が朝廷に大政奉還。翌慶応 4 年（1868 年）1 月に鳥羽・伏見の戦いが行われて戊辰戦争が始まる。

慶喜の江戸帰還後、1 月 12 日から江戸城で開かれた評定において、小栗は榎本武揚、大鳥圭介、水野忠徳らと徹底抗戦を主張する。この時、小栗は「薩長軍が箱根を降りてきたところを陸軍で迎撃し、同時に榎本率いる旧幕府艦隊を駿河湾に突入させて艦砲射撃で後続補給部隊を壊滅させ、孤立化し補給の途絶えた薩長軍を殲滅する」という挟撃策を提案した。後に、この作戦を聞いた大村益次郎が「その策が実行されていたら今頃我々の首はなかったであろう」として恐れたという逸話がある。実際、この時点において旧幕府側は、鳥羽・伏見の戦いに参加していなかった多数の予備兵力を保有していたが、慶喜はこの作戦を退けて勝海舟の恭順論を採った。

ただし、一方で慶喜は和戦両論の構えを取っており、横浜の警備体制を増強して、箱根関と碓氷関に目付を派遣し、官軍を迎え撃つ体制を強化している。小栗の作戦を却下した理由としては、その時点での慶喜はあくまで武備恭順の姿勢であり、家臣団が小栗の意見に引きずられて武備恭順の域から逸脱するのを防ぐためだったと推測されている。慶喜としては抗戦の意思を捨てる気はないものの、薩長の官軍化に困惑する味方を安心させる為、朝廷に対して恭順の意思を見せる必要があり、明確に敵対の意思を示す小栗の作戦は受け入れることが出来なかったとされる。なお、幕臣のほとんどは主戦論を唱えていたが、小栗の作戦以外にも「軍艦で大坂城を攻撃する」「富士川で官軍を食い止める」「碓氷峠を防衛線にする」など様々な作戦が提案される議論百出の状態で、一つの意見に集約できる状態ではなかったという。

小栗の墓所・東善寺（群馬県高崎市）

慶応 4 年（1868 年）1 月 15 日、江戸城にて勝手掛老中松平康英から呼出の切紙を渡され、芙蓉の間にて老中酒井忠惇、若年寄稲葉重正から御役御免及び勤仕並寄合となる沙汰を申し渡されると、同月 28 日に「上野国群馬郡権田村（現在の群馬県高崎市倉渕町権田）への土着願書」を提出した。旧知の三野村利左衛門から千両箱を贈られ米国亡命を勧められたものの、これを丁重に断り、「暫く上野国に引き上げるが、婦女子が困窮することがあれば、その時は宜しく頼む」と三野村に伝えた。また、2 月末に

渋沢成一郎から彰義隊隊長に推されたが、「徳川慶喜に薩長と戦う意思が無い以上、無名の師で有り、大義名分の無い戦いはしない」とこれを拒絶した。3 月初頭、小栗は一家揃って権田村の東善寺に移り住む。当時の村人の記録によると、水路を整備したり塾を開くなど静かな生活を送っており、農兵の訓練をしていた様子は見られない。

最期
慶応 4 年（1868 年）閏 4 月 4 日、小栗は東山道軍の命を受けた軍監豊永貫一郎、原保太郎に率いられた高崎藩・安中藩・吉井藩兵により東善寺にいるところを捕縛され、閏 4 月 6 日朝 4 ツ半（午前 11 時）、取り調べもされぬまま、烏川の水沼河原（現在の群馬県高崎市倉渕町水沼 1613-3 番地先）に家臣の荒川祐蔵・大井磯十郎・渡辺太三郎と共に引き出され、斬首された。享年 42。
死の直前、大勢の村人が固唾を飲んで見守る中、東山道軍の軍監に対して、小栗の家臣が改めて無罪を大声で主張すると、小栗は「お静かに」と言い放ち、「もうこうなった以上は、未練を残すのはやめよう」と諭した。そして原が、「何か言い残すことはないか」と聞くと小栗はにっこり笑い、「私自身には何もないが、母と妻と息子の許婚を逃がした。どうかこれら婦女子にはぜひ寛典を願いたい」と頼んだという。処刑の順序は荒川・大井・渡辺・小栗の順だったという。原は後に、「小栗は自分が斬った」といっていたが、地元の研究者によれば、安中藩の徒目付浅田五郎作が斬ったという説もある。
＊＊＊

脇道が長くなったが、小栗上野介忠順と言う人物がひとかどの人物でもあった事を知っておく事が横須賀造船所の由来を知るうえで重要だと考えたからである。

　通訳の栗本瀬兵衛を伴ってフランス公使ロッシュと会った小栗上野介は様々交渉の末、ロッシュの申し出を受け入れ、小栗は幕閣を説いて、造船所、製鉄所のことをロッシュに一任することになった。小栗らはフランス側と相談の上、元治元年（１８６４）十一月十日、 造船所の場所は相州三浦郡横須賀港にきめ、横浜本村石川口に製鉄所をおくこととした。これはロッシュ公使が本国の海軍提督で横浜にきていたショールイスと相談のうえ、フランス海軍の工部士官ウェルニーを幕府に推せんし、その の意見によったと言われている。なおウェルニーの計画によると、横須賀造船所の設計に先立って、まず製鉄所を横須賀と横浜に建て、これを艦船修理の用にあてる。さらにフランス海軍士官を雇用してこの製鉄所の幹部とし、また日本人にその業務を修得させる。さらに製鉄所は今後一年間で出来るが、造船所の方は、たとえ規模を小さくしても、二つのドック、三つの船架を設けて、さしあたりフランス人四十人ばかり

を雇用しなければならず、日本人の労務者は二千人に及び、その経費は落成までに２４０万ドルは必要だろうと言う事だった。

こうして幕府では小栗上野介らが検討したこの案を採用され、慶応元年（一八六五）一月二十九日に閣老水野和泉守、参政酒井飛騨守連署の約定書をロッシュ公使に手交した。その主な内容は、上等機関官ウェルニーを上海から呼び寄せた上で

１．製鉄所一ヵ所、修船場大小二カ所、造船所三カ所、武器庫および役人、職人の役所とも四か年で落成のこと。

２．横須賀港の地形は地中海の海岸ツーロンに似ているので、造船所はここに建造の様式にならって、およそ横四百五十間（約８１０メートル）、縦二百間（約３６０メートル）とする。

３．製鉄、修船、造船の三局を取り建て、その諸入用総計およそ一か年六十万ドル、都合四か年二百四十万ドルで結成のこと。

なお両国政府の許可を得て、ロッシュ公使は上等機関官ウェルニーに専任を命じ、日本の勘定奉行松平対馬守、軍艦奉行木下謹吾、目付山口駿河守、栗本瀬兵衛及び浅野伊賀守にももっぱらその取扱いを命じ、両国協力して完成を急ぐこと

と言う内容であった。

以上が初の西洋式造船所が横須賀に決定された顛末です。この経過を指して小栗上野介の独断専行と非難する筆者もいるようだが、既にオランダに出張中の肥田浜五郎にその経過を説明しながら了解を取るのは、当時の交通通信事情を鑑みても非常な困難を極め、又小栗上野介の仕事の速さからして、致し方なかった面の方が強いと思われる。

此の後、不本意ながらも肥田浜五郎は横須賀造船所の完成に向かって働くわけですが、次号ではその内容について概説したい。

＊＊

編集後記：本号３ページに長尾氏より『海のますらを』の紹介が記載されていますが日本海洋塾ホームページ内の以下の URL から『森利彦コーナー』の青字で表記されている『海のますらを一東京高等商船学校』をクリックする事で、当該動画が視聴可能になっております。スマホ、パッドでの視聴は QR コードを直接読み込んでください。

https://kaiyou-juku.org/move/index.html

＊＊

特定非営利活動法人　日本海洋塾
＜NPO　Meijimaru　Memorial　Academy＞
事務所：〒135－8533東京都江東区越中島2－1－6
東京海洋大学越中島会館2F
TEL：03-6458-5272
FAX：03-6458-5272
E-Mail：kaiyojuku5122@train.ocn.ne.jp
ホームページURL：http://kaiyou-juku.org